

キャッチャー・イン・  
ザ・タンク

yastr

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

特殊なカーボンの研究に携わる男が戦車道の安全のために奮闘する話です。

全三話の中編作品。

ヒロインはローズヒップで原作キャラとオリ主の恋愛要素を含みますので、ご注意ください。

# 目次

『キャッチャー・イン・ザ・タンク 前編』	1
・ 『キャッチャー・イン・ザ・タンク 中編』	22
『キャッチャー・イン・ザ・タンク 後編』	43



## 『キャッチャー・イン・ザ・タンク 前編』

二十一歳になった。

「ローズヒップさん、君がほしい！ ぼくと一緒に来てほしい！」

「……はあ」

二十一歳になったぼくは女子高生にプロポーズをしていた。

二十歳になった時、これから先はもう感慨深く年齢を数えることなんてないと思つたが、それを副所長に伝えたところ「ばかやろう。そつから先はあつという間だからな。おれなんて十年毎が怖くて怖くてしかたねえんだ」と怒られたことを思い出す。だとしたら次のメモリアルイヤーは三十歳。あれから一年経ち、三十歳になったときのぼくはいつたいたいしているだろうと思う。

初夏の陽ざしの中でプラスチックの容器に入った麦酒を飲み、どうしているんだろうねえと考える。眼下では女子高生たちが戦車を走らせ、敵のフラッグ車を血眼になって倒そうとしていた。

戦車道。千九百二十年代からある伝統的な武道のひとつで、華道や茶道と並んで淑女

を育成する習い事とされている。当初は事故なども多く、他のふたつと比べれば危険な習い事とされていたが、つい十年ほど前にとんでもない技術革新があつて以来事故の報告はぐつと減つた。いわゆる、特殊なカーボンによるコーティングである。

軽く、強靱で、展延性に富み、人類の夢をかなえた新素材。特殊なカーボンは実生活のありとあらゆる場所で応用され、そして人々の生活を一変させた。

それはもちろんぼくも例外ではない。

十六歳の夏にぼくは自由研究としてこの特殊なカーボンを取扱い、そしてあるマイナーな不活性ガスを満たした環境で加熱したところ、それが共有結合物質にあるまじき展延性を獲得することを発見した。それまでのカーボンは高弾性を持った繊維状の塊としてしか使用できなかったため、この発見は世界中で取り上げられることになる。

ぼくの夏休みの研究は突然高校一年生を丸々潰して取り組むべき研究となり、いつの間にか天才高校生としてテレビ出演を繰り返し、そしてついには飛び級して大学の研究員になっていた。人生何が起こるかわからない、とはやつとの思いで付き合つた彼女に三日で振られた友人の言葉だが、ぼくもそう思う。人生何が起こるかわからない。

ぼくの現状もそうだと思います、なんだか苛立ちを覚えて麦酒をぐくぐくと口に含んだ。先日研究室の学生がぼくの陰口を言つていたのを思い出す。

「天才少年とか言われていたけどここ数年はなんの実績もないし、まぐれあたりの一発

屋だよな」

元々馬が合わない学生だったから、姿が見えた瞬間にコーヒーメーカーの隅に隠れていたが、そんなことせず堂々と休憩室から出ていけばよかったと後悔した。ぼくは小さい頃から他人の話を全く聞かない子供で、こういった話題からは常に逃げ続けてきた。ここに来てからもひたすら研究を続けてきたし、話す相手と言えば暇そうな副所長ぐらいだ。そんなわけでまさか自分がこんな話のネタにされているとは思わず、ぼくはそのあと掃除のおぼちゃんに発見されるまでたつぷり三時間コーヒーメーカーに挟まって落ち込み続けた。

それからは週末まで研究が全く手につかず、そして考えれば考えるほど彼の言った言葉が間違っていないことを確信する。

特殊なカーボンの展延性は身に余る偉業だったと思う。あの発見によつて特殊なカーボンはありとあらゆる場所にコーティングされるようになり、街中を走る車はいまやアレなしでは審査基準を通らない。ぼくは夢の新物質の育ての親（産みの親ではない。きい！）として崇められ、分不相応なほどの賛辞を受けた。だが、中身は単に世間知らずの十六歳だ。社会はともかくぼくは何も進歩していない。

そんなわけで研究が一切手につかなくなり、ぼくは久々の休みを利用して戦車道の試合を観に来ていた。最初は高校野球にしようかとも思ったのだが、あれは油断している

とOBと間違われて異常な声だしを要求される場合もあると言われたのでやめておく。かといって屋内競技ではなんとなく汗水流すという感じがしないので、ぼくの選択肢は消去法的に戦車道に導かれていった。

噂に違わず、戦車道の試合は居心地がいい。まだ季節も初夏であるということも気温もそこまで高くないし、観客の雰囲気にも「おっ、やってるやってる」的な気安さがある。ぼくは久々の陽気に気持ち弾み、飲み慣れない麦酒なんて買って試合を観戦していた。

観客席の前に据えられた大スクリーンには『聖グロリアーナ女学院対マジノ女学院』とある。両方とも高校戦車道の世界ではかなりの有名校であり、特に聖グロの方はぼくの研究所がある横浜に学園艦が寄港していることもあって何度か試合を目にしたことがあった。この試合会場の気安さも地元チームの安心感があるのかもしれない。

試合会場を一糸乱れぬ隊列で進む聖グロの戦車は美しい。ぼくはあんな視界の悪い乗り物でよく歩調を乱さずに進んでいけるなあと呟く。カーボンの断熱効果でかなりましとはいえ、この真夏にあんな鉄の塊に乗り込むのも大したものだ。ぼくが高校生だった頃も同級生たちはそうして汗水を流し、その間ぼくはひたすらデータとにらめっこしていた。そのくせしていまやこうして現実逃避である。

一度思考の沼に入り込むといつまでも自分のなかだ。ぼくは枝豆をむさぼって麦酒

をあと、再び戦車の試合に目を向ける。そこではいつのまにか両校の戦車が会敵し、戦闘が始まっていた。おいしいところを見逃しちやつたなあとため息をつき、ここからは見逃さないぞと居住まいを正す。マジノ女学院はどうやら堅く守りを固めて聖グロを迎え撃つ様子だが、それに対して聖グロはひたすらに動き回って相手をかく乱し、敵戦車を確実に葬っていく。

だがその中に数両、いや正しくは一両だけおかしな動きをしている戦車がある。

はじめは何かの作戦行動かと思ったのだが、それにしても明らかに無駄な動きが多すぎる。あれは確か巡航戦車クルセイダーといったか。聖グロの戦車の中では結構足が速い部類のものだとは聞いていたが、それにしたつてというぐらい試合会場をかつ飛ばしていた。ぼくはその様子を見ながらそわそわと落ち着かなくなってくる。

思い出すのは昨年の夏、全国大会の決勝での出来事だ。雨でぬかるむ会場のなか、試合中の不慮の事故により一台の戦車が川に落ち、選手たちが救出されるという事故があった。ぼくはその試合をテレビで観ながらその戦車に乗っていた選手たちのことを思い、未だ多くの危険が残る戦車道というスポーツのことを思う時間が増えた。

そうだ、いくら特殊なカーボンでコーティングされているとはいえ、加速した戦車がぶつかればもちろん車内は攪拌される。すり傷や打撲は珍しいことではないし、眼鏡が割れてしまったという報告を聞くこともある。ぼくは全国大会の決勝が終わった後で

戦車道の年間事故数を調べ、そして当然のようにその件数の高さに激しく心を痛めた。自分が作り出した技術が完全なものではないという失望が胸に広がり、焼けつくような焦燥感が生まれた。

ぼくは息抜きに来た戦車道の試合で再びそんな気持ちと向き合うことになり、そして無茶な動きを繰り返すクルセイダーに対して「安全第一でやってくれ！」と必死に祈る。だが結局思いはかなわず、ついにクルセイダーは敵機の砲撃を受けてスリップし、付近にあつた岩にぶつかって沈黙してしまう。白旗こそ出ていないが、車内はきつとしちゃかめつちやかだろう。ぼくは大きいため息をつき、頭を抱える。

しかし次の瞬間、先ほどのことなどなかったかのように再びクルセイダーが動き始め、ぼくは自分の目を疑った。いや、それどころか先ほどよりもスピードが速い。

クルセイダーは再び高速で動き回って敵をかく乱し、先ほど砲撃を受けた敵に肉薄すると、お返しと言わんばかりに相手に砲撃を撃ちこんだ。その砲撃によって敵戦車に白旗が上がる。だがそれにも興味はないと言わんばかりに再び戦場を縦横無尽に駆け巡り、何度も何度も砲撃を受け、そこらじゅうにぶつかり続けた。

「すげい……」

ぼくの口から感嘆の声が漏れる。あのクルセイダーはまるで恐れを知らない獅子のように走り続け、不屈の精神で敵と戦い続けていた。聖グロの戦車道において尊ばれる

「優雅」とは程遠いように感じるが、ぼくはその姿をみて激しい高揚感に襲われている。もはや試合の大勢も見ることは敵わず、結局クルセイダーから白旗があがるまでその一両ばかりを眺めつづける。動きを停めたその戦車が回収車に運ばれていく様子を見て、いつのまにかぼくは試合会場から離れ、回収先へと向かっていた。

自分でも何をしたのかよくわからない。麦酒も枝豆も放り出して戦車の搬送先に進んでいくと、ちょうど先ほどのクルセイダーが格納され、そのハッチが開く瞬間だった。やがて車内から車長が這い出し、その燃えるような赤毛が目映る。

この瞬間のことをぼくは永遠に忘れないだろう。赤毛の少女は全身に大小様々な傷を作り、タンクジャケットのそこかしこに紅茶のシミが浮かんでいた。戦車内を舞った煤で頬は黒く汚れ、しかし胸を反らした堂々たる姿で戦車の上に立つ。

その姿にこれまでの人生で一度として感じたことがないほど胸が高鳴る。心の底からの叫びが喉からこぼれそうになり、慌ててそれを飲み込んだ。ここで注目を集めてしまつては彼女に近づくと前に警備員によって取り押さえられてしまうかもしれない。

ぼくは出来る限り早足に、しかし焦っている風には見えないように客席を降り、彼女に近づいていく。戦車から降りて仲間たちと語らい、紅茶を口に含む彼女が見える。ぼくは一直線にそちらへ近寄り声をかけた。

「あ、あの一！」

「はい？ なんですか？」

彼女の顔にいぶかしげな表情が浮かぶ、知らない男から突然話しかけられたのだから当然の反応だろう。ぼくはズボンのポケットから財布を取り出すと中にしまっておいた名刺を取り出し、頭を下げたそれを差し出した。

「……カーボン化学研究所、准教授、加賀護（かがまもる）様。研究職の方？」

肩書と所属が判明し、彼女のそばに立っていたチームメイトたちの警戒が少し和らぐ。カーボンの研究に携わっていると聞けば戦車道の試合を見に来るのも納得してもらえらるだろうし、不審者として通報されることもないだろうと思ったが、正解だった。

「先ほどの試合を拝見して、非常に感動しました！ 衝突を恐れぬ勇氣、敵に砲撃を受けても挫けない勇敢さ。本当に素晴らしい戦いを見せてもらえ、感謝の念に堪えないです！ 現状まだ完璧とは言い難いカーボンコーティングでは車内で打撲や擦り傷を負ってしまうこともしばしばですが、それを恐れずに突貫していった姿に……」

「ちよー！ 早い！ 早いですわ！」

目の前の少女があっけにとられたような顔で言葉を遮る。ぼくはまた悪い癖が出てしまったとぼさぼさの頭をかき、それから何度か呼吸を整えた。

「失礼しました。あの、名刺に書かれていた通り、ぼくは加賀護といいます。あなたは「聖グロではローズヒップと呼ばれていますわ！」

ローズヒップ、というとローズヒップティーだろうか。そういえば聖グロリアーナ女学院では優れた技能を持つ生徒を幹部として遇し、それぞれ紅茶に関連した名を与えると聞いたことがある。ぼくは口の中で何度か「ローズヒップさん、ローズヒップさん」と呟き、それから彼女のことをまっすぐに見つめて堂々たる声を発した。

「ローズヒップさん、君がほしい！ ぼくと一緒に来てほしい！」

「……はあ」

そんなわけで冒頭につながる。

試合が終わった後でもう一度来てほしいと言われ、ぼくは試合が終わるまでそわそわと落ち着かないまま会場中を動き回り、試合のアナウンスが流れるとすぐに聖グロ陣営にまで走っていく。焦りを隠さずに試合の片づけをしていた生徒のひとりに話しかけるとすぐ「ああ、あなたが……」と眺められ、それから隊長のもとへと案内された。

陣営の奥に白いラウンドテーブルが置かれ、それを囲むようにして三人の生徒が座っている。ぼくはその中に先ほどとは違う聖グロの制服を着たローズヒップさんの姿を見つけ、それからすぐに聖グロの隊長らしい女の子に声をかけられた。ぼくはあらかじめ用意しておいた名刺を胸ポケットから取り出し、聖グロの隊長さん——ダーズリンさんというらしいに差し出す。

自己紹介が済むとすぐ席に着くように勧められ、ぼくはローズヒップさんの左隣に座った。逆側に座っている大きなリボンの女性がこちらを訝しげに見つめているのが気にかかるが、おそらく女子校育ちで男に慣れていないのだろう。できるだけ気にしないようにしつつ、ダージリンさんから促されるままに事の次第を伝え始めた。

「つまり、戦車内の新しい安全機構のテストのためにローズヒップに協力してほしいと、そういうことですよわね？」

「そうです！ あの手猛果敢な運転、衝突を恐れない心。この役目はローズヒップさんにごそふさわしいんです！」

力強く返答したところ、ローズヒップさんが肩を躍らせながら爛々と目を輝かせ、それとは対照的にダージリンさんと大きなリボンのひどが脱力したように椅子に座り込んだ。どういふことだかわからないが、ぼくは気が付かないまま彼女たちにひどく緊張を強いていたらしい。ダージリンさんが億劫そうに姿勢をただし、それから落ち着き払った様子で再びこちらに向き直る。

「アッサム」

彼女がそう呟くと、リボンの女の子がこちらを見詰めてくる。アッサム、アッサム地方で作られる紅茶の種類だっただろうか。つまり彼女も聖グロの幹部クラスであり、説得しなければならぬ相手ということだ。

「話はわかりました。ですが我々もとして、隊員に危険があるような実験にはおいそれと返事を出せませんね。夏の大会も近づいていますから、万一があつた場合のことを考えればNOと言わざるを得ません」

「それに関しては心配ありません。実験では常に研究所から医療スタッフを帯同するつもりですし、実験に使用する戦車に關しても実際の試合で使われる安全基準を下回るような真似はしません。まず自動運転で車内に伝わる衝撃を計測し、それからローズヒップさんに衝突実験を行つてもらつてもりです。もちろん、お望みでしたらみなさんが実験の場に立ちあつていただいて、危険だと判断されたらすぐに中止していただいて結構です」

アッサムさんとぼくとの間で交わされる言葉を聞き、ローズヒップさんの表情が一喜一憂する。表情をみたところ彼女としては是非にでもやりたいようだが、あとはこのダーズリンさんの判断次第ということらしい。応答が終わつたのを確認し、ぼくは目の前で静かに紅茶を飲むダーズリンさんをまつすぐに見つめる。

「ローズヒップ、いかが？」

「私は是非にでもやってやりたいですわー！」

よしつ。と心の中でガツポーズをとる。右隣でアッサムさんが呆れたように額を抑えるのが見えたが、ローズヒップさんは完全に乗り気のようだ。ここで彼女たちに了

承してもらえれば、あとは彼女のご家族から了解をいただくだけで全ての準備が整う。

結局、ダーズリンさんとアツサムさんから実験の参加を認めてもらい、ぼくは改めてローズヒップさんと向かい合う。

「突然こんなことをお願いして申し訳ありません。ですがあなたのような勇敢な走りができるひとにこそ、この実験に携わってほしいとぼくは考えています。できる限りのことをします。よろしくお願いします！」

そう言つて頭を下げると、すぐに両手をひっぱられ、痛いほどの力で手をぶんぶん振り回される。

「おもいつきり走つちやつて構わないんですわね!？」

その言葉になんて頼もしいんだと胸が震え、ぼくは大きな声で「はい！」と答える。すぐそばでダーズリンさんとアツサムさんが複雑そうな表情を浮かべていたが、それがなぜなのかはよくわからなかった。

そうと決まれば善は急げで、ぼくはそれから大急ぎで研究所に戻る。聖グロのひとたちには何かあればすぐに名刺に記載された連絡先に連絡してくれと言い、後日改めて学校を通じて連絡させてもらうことを伝えた。事前の準備はどれだけ入念にしておいても足りるということは無い。

ここ数年感じていなかった胸の熱を感じ、ぼくは自分のデスクいっぱい戦車道にお

けるカーボンコーティングの資料を広げた。かつて自分で作り上げたものが現在でもほぼ同じように使われているが、ローズヒップさんの力を借りてこれに更なる改良を加える。それはとりもなおさず過去の自分を越えることに他ならず、停滞していた自身を前に進めていく取組であると感じた。

ぼくはそれから朝までいくつも案を出し、最終的には三つの案に絞って床に倒れるようにして眠りこむ。次に目が覚めた時には掃除のおばちゃんによつて顔にモツプを押し付けられていた。

副所長に今後の方針について相談すると「今更そんなことを……」と呆れられたが、特に反対はされなかった。ぼくは特殊なカーボンの加工技術でいくつかの特許を取つていたし、そのいくらかはこの研究所にも納められているため、研究内容について横槍を入れられることはほぼない。今更そんなことを、と言われたのはおそらくみんなが夢中になっているアレのことだろうが、残念ながらぼくにとっては過去の自分を越えることのほうが大切だった。

聖グロリアーナ女学院との打ち合わせも事無く進み、ローズヒップさんのご家族への了承も取れた。彼女の家に直接お伺いしたところものすごい大家族で驚いたが、その家を束ねているだけあつてご両親は豪放磊落を絵にかいたような人であり、彼女の実験へ

の参加を笑顔で受けてくれる。

ここまでは至極順調に進んでいった。月並みだが順調すぎて怖いと思っておくべきだったのだ。

肝心の実験は全くと云っていいほどうまくいかなかった。

実験は、ローズヒップさんが全開で運転するクルセイダーを厚さ百センチの鉄板にぶつけることで行う。

今回の実験に際してぼくが用意したプランは三点。現行のコーティングをさらに厚くしたプラン。車内でよく打撲が起こる場所に対してスポット的にコーティングを増やすプラン。そしてエアバッグのように乗組員を受け止めるプランだ。

全て事前に二度テストを行い、一度目は自動運転で衝撃を計算し、二度目には人体ダミーを乗せてその損耗状態をしっかりと検査した。これを一週間ごとに分けて行う。

事前試験では人体に与える影響は全くとわかったが、それは当然のことである。戦車道で使用される砲弾はすでにコンピューター制御されており、発射後の軌道予測で人体に衝突する可能性が二十パーセント以上になると分解されるようになっていた。確実な安全性が保障されていないのは戦車の内部だけ。ぼくが求めているのは乗る人すべてが絶対に安全だと確信でき、一切の恐怖なく戦車に乗ることが出来る世界だった。

だが。

「ローズヒップさん、どうですか!？」

「うーん、遅くなつてますわ! ダメ!」

最初の試験ではコーティングを厚くしすぎたせい、か戦車の速度が落ち、実際の試合では選手から不評が出るということとで失敗。ぼくはすぐに研究所に戻つて第二のプランに取り掛かった。研究を行つていくうえで失敗など当然のこと、このときはそう考へていた。

そして迎えた翌週。

「ローズヒップさん、どうですか?」

「普通にしつちやかめつちやかでしたわー!」

一週間後はスポット的にコーティングを厚くしての試験だったが、そんなことをしたところでローズヒップさん並の運転をするひとではどこにどう身体が動くかは予測不能。というわけでふたつめも失敗。

ぼくは落胆しつつも改めてローズヒップさんの運転の規格外さに驚き、試験を終えて満足そうな表情の彼女にスポーツドリンクを手渡す。それを受け取つてごくごく飲み干す彼女を見つめ、その健康的な赤みの差した喉がゆつくりと上下に動く様子を眺めていた。

「ご協力ありがとうございます。危険が伴う実験なのに、こんなに献身的に」

「構いませんわ！ 私は楽しんでますの」

その言葉に気後れしたところや怯えは一切なく、ぼくは彼女の精神力に改めて敬服する。戦車道は怪我をするスポーツだ。それは逃れようもなく、間違いない。華道や茶道、その他の球技などに比べれば間違いなく危険があるし、それ故に少々時代遅れとなってしまった感は否めない。それなのに彼女はただひたすらに前だけを見据えている。

「ローズヒップさんは何故そこまで迷いなく走れるんですか」

そんな風に尋ねてしまったぼくに彼女は少し悩んだような表情を見せ、それから満面に笑顔を浮かべる。

「私にできることだからですわ。できることをやる。ダーズリン様が私に教えてくれたことですの！」

そう言つてどこかへ駆け出す彼女を見送り、ぼくはしばらくその場に立ちつくしていた。できることをやる。ぼくは今まで自分のできることを出来ていただろうか。思えば闇雲な実験ばかりを繰り返し、運よく再び何か落ちてくるのを待ち続けていただけだったのかもしれない。

ぼくはすぐに研究所に戻り次の実験に向けて準備を開始する。既に最初に用意した

プランのうちふたつは失敗し、残るプランはひとつのみ。この最後のひとつも失敗するとみて次のことを考えておいた方がいいだろう。ぼくは夜を徹して作業に打ち込み、副所長や掃除のおばちゃんから受けた差し入れで食いつなぐ。

動き出した歯車を止めてはいけなさとそれだけ考えつづけ、そして再び一週間が巡る。

「ローズヒップさん、どうですか……」

「すぐ動けない！ いちばんダメですわ！」

エアバッグは白旗判定の出ない衝突でも反応してしまい、そのたびに戦車が動けなくなるため失敗。ローズヒップさんとしては息苦しいし過保護だということまで一番評判が悪かった。

結果、実験の第一プランから第三プランまでは全て失敗。これを踏まえた上でのプランの練り直し、再実験ということになる。半ばわかっていたこととはいえ、かなりへこむ。天才少年とか言われてもてはやされていたことも確かだし、この調子では一発屋も間違っではない。

ぼくは回収されていくクルセイダーを見ながら大きいため息をつく。

失敗は勉強であり、発見である。そう言ったのは偉大なるトーマス・エジソンだ。だがこれはきつと彼の人生訓であるとともに、自分自身を慰める意味も含まれていた。

うとぼくは思う。今回のアプローチは全て失敗。自分自身が戦車に乗らないことも原因のひとつだ。ぼくは選手が何を求めているのかわからず、結果的に操縦性を落とすような真似ばかりしてしまっていた。

目の前で「今回も楽しかったですわ!」と笑うローズヒップさんを見て少しだけ救われた気持ちになる。だがそんな彼女をなだめる聖グロのメンバーの表情は相変わらず複雑そうだ。自分のチームの選手があんな風に何度も衝突をくりかえすのを見て、心配にならないわけはないだろう。ぼくは以前もあつたダーズリンさんとアツサムさんに近づき謝罪の言葉を口にする。

「貴重なお時間をいただいてこのような結果となつてしまい、申し訳ありません」

「……失敗は成功のもと、と言いますわ」

自分で考えていたのと全く同じ慰めをダーズリンさんから受け、声もあげずに肩を落とす。折角貴重な練習時間を削ってきてもらっているのに申し訳ないばかりだった。

「これでローズヒップの突撃癖が抜けなくなつてしまつたらどうしましょう」

「問題はそこね。あの子つたら本当に楽しんでるから……」

アツサムさんとダーズリンさんが何事かを呟いたが、その言葉はぼくの耳には届かなかった。ぼくは肩を落としたまま実戦場をぐるぐると歩き回り、しきりに衝突用の鉄板をさすり、それからクルセイダーの装甲をなでた。

かつては戦争の道具として使われていた戦車を競技の道具として利用するまで人類は進歩した。現在この世界において戦争や紛争はほぼ起こっていない。ここ十年でめまぐるしい技術革新が矢継ぎ早に起こり、これから先外交問題による武力衝突は激減していくだろうと言われている。

ぼくは戦車を見詰め、胸元から古びた携帯音楽プレーヤーを取り出し、イヤホンを耳に詰める。ややあつてから音楽が流れだし、二十一世紀の初めごろに日本で流行したロックバンドの音楽が流れ始めた。印象的なギターのアルペジオとそこに絡むドラム。無力感を抱えつつも前に進んでいくことを歌った歌詞。ぼくはいつも打ちのめされた気分になるたびにこの曲を聞いてきた。

音楽プレーヤーをぎゅつと握りこむと、いつのまにか頬を汗が伝っていた。おそらくワイシャツは汗みずくになってしまっただろう。都市から離れているとはいえ夏の熱気はすさまじい。ぼくは目に入りそうになった汗をぬぐい、いつのまにか視界の端にスポーツドリンクが差し出されていたことに気がついた。

「あ、ありがとうございます」

どもりながら受け取ると、それを差し出していたローズヒップさんが「どういたしましてですの」と笑う。どうやらこのあいだのお返しということらしい。ぼくはさしたる力も入れずにスポーツドリンクを開封するとごくごくとそれを飲んだ。

「こわーい顔していたからおすそわけですのー！」

そう言つて彼女は再びぼくの手からスポーツドリンクを取り返し、残りを飲み干してしまふ。それを咎めることもできずにただ眺めていると、彼女が「もうありませんの」と笑つた。そういう意味ではないんだがと言おうとして言葉に詰まる。

ぼくの乏しい人生経験と青春系知識によるとあれは確か間接キスというやつだったような気がするが、今の子からしてみるとどうやらその程度のことは大したことではないらしい。いったいどうしたのかとこちらを訝しむ様子をみてぼくは顔が赤くなつていないかと恥ずかしくなり、やはり高校はしつかり通つておくべきだったと考える。

学園艦制度が生まれて以降世界における子供の独り立ちは低年齢化の一途をたどつたが、やはり能力があるからといつて安易に飛び級させたりするのはよくないような気がする。同世代とともに過ごすことで発達する情緒というものもあるはずだ。ぼくは彼女よりも五歳近く年上なのに情けなく胸打つ心臓をなだめつつ、現行の体制の批判を行う。考えてみるとかなり情けない。

しばらくそうやって眉間に皺を寄せたり顔を赤らめたりしていると、やがて彼女も突然それに気が付いたのかペットボトルをわたわたと取り落とし、頬を抑えてくねくねと動き始めた。どうやら何も考えていなかったようで「どうしましょう、殿方とこのような」とか「きつとダーズリン様では的確なアドバイスをいただけませんか」とかちよつ

と向こうに聞こえたらやばそうな言葉が聞こえてくる。

ぼくは大変な居心地の悪さを感じ、すぐに話題を変えようと実験の話をはじめた。

「これで実験の第一段階が終了です。大きな成果は上げられませんが、次は必ず成功に向けて前進していきたいと思えます。その……」

言葉を区切り、ローズヒップさんのことを見詰める。頬が赤く染まり、すこし釣り目がちの瞳がまん丸く見開かれている。

「そのときはまた協力していただけますか？」

「……もちろんですの」

笑顔とともに返された言葉にぼくは大きいため息を吐き、それからふたりに実験場を後にする。これからは戦車道の試合の予定が入ってくるらしく、今までのように定期的に参加してもらうことは難しいと言われたが、それでもかまわない。いつのまにかぼくは実験のパートナーは彼女しかいないと心の奥で感じ始めていた。

ぼくは近いうちにここまで実験を手伝ってくれたことについてのお礼をさせてもらうことを約束し、入道雲の下に消えていく彼女たちのことを見送った。できればこの夏がはじまり、戦車道の全国大会が始まる前に新機構を形に持っていきたかったが、いまではそれも難しい。空にはすっかり夏の雲がかかり、遠くでセミの声が響いていた。

## ■ 『キャッチャー・イン・ザ・タンク 中編』

いわゆるデートというやつではないだろうか。

ローズヒップさんを食事に誘ったのは良いものの、前日になって突然そんな思考に囚われた。

デートだとしたら人生初の出来事であることは間違いないし、いったいどのような対応するのが正解なのかわかりかねる。髪型はしっかり整えたほうがいいだろうか。服装は普段の白衣ではまずいだろう。ぼくは押し入れの中にしまいこんだシャツとサマージャケットを取り出し、すっかり背が伸びなくなったことを感謝した。

おそらく向こうはこんな年上の男と食事をする程度でデートとは思ってくれないだろうが、少なくとも彼女に恥ずかしく思われない程度には身ぎれいにしておきたい。ぼくはそれから夜遅くまで整髪料を付けて髪型を整え、何度も鏡の前に立って服装がおかしくないかチェックをおこなった。

自分でも情けない話だが、研究以外で女性と出かけるという経験が初めてということもあり、まるで高校生になったかのように気持ちが高ぶってしまうのを感じる。とはい

え勉強ばかりしていたほうがあのまま高校に通い続けたところでそんな経験を出来たかは疑問だ。あと冷静になって考えてみると二十一の男が女子高生と出かけることを考えて色気づいているのも道徳的に問題がある。

結局ぼくは鏡の前で何度も「お礼をするだけ」と繰り返し、精神統一を行ってから眠りについた。理性こそが人間を人間たらしめる。ぼくは理性ある人間だった。

とはいえ翌日待ち合わせ場所にたどり着けばそわそわと緊張してしまうのも無理はない。無理はないと思う。

なんだか足が熱を持ったようになり、ぼくは靴の中でもぞもぞと指を動かし続ける。昔から緊張したり不安になったりすると足が熱くなる。思えばサンダル以外の履物も久しぶりだ。密閉された革靴がこんな状態にさせているんじゃないかと、靴を脱ぎ捨てて足を拭きたくなる欲望を抑えつつ彼女のことを待った。

日差しがまぶしく、肌痛い。ここ数年ですっかりひきこもりのような生活が板についてしまい、他のひとたちのように民間と関わりを持つこともないぼくは完全に世間とずれていた。

いや、そういうええ一度だけコンビニでアルバイトしてみたことがあった。お金に困ってとかではなく、自分もそういうことをしてみたいと思つたことだったが、覚える仕事が多すぎるしレジに立つと緊張してしまつて三日ともたなかつたことを覚えている。

再び実験の結果を思い出す。ぼくから研究を取ったら何が残るだろう。きつと何も残るまい。展延性関連の特許があるから生涯生活に困ることは無いだろうが、ただそれだけだ。ぼくはきつと早晚自分の居場所を見失って頭がおかしくなってしまうに違いない。

気分が落ち込んでくるのを感じると、ちょうどそのとき道の向こうに見慣れた赤毛が目に入ってきた。こちらに気が付いて遠慮がちに手を振る彼女にぼくも緊張しつつ手を振り返し、なんとなく気まずい思いになりながら信号が変わるのを待つ。いままでの人生でこれほど信号待ちが長く感じたことがあつただろうか。

ようやく信号が青になると彼女が駆け足でこちらに近寄り、元氣よく挨拶をしてくれる。昼ごろの駅前とその声はよく響いたが、いまぼくは周囲からどのように見られているのだろうか。通報されたりしないといいが。

「加賀さん、今日は普段と違う格好ですよ」

「さすがにぼくだって女性と出かけるときに白衣とサンダルでは来ませんよ」

そう答えると彼女は首をかしげて「女性……」と呟いていたが、すぐに笑顔でこちらに向き直る。まさか自分が女性であるという実感が無いわけではないだろう。

「それより、ローズヒップさんは制服姿なんですね」

「うっ、聖グロは校則で外出する時も制服と決められていますの……」

苦い顔で答える彼女に、それは若いのにつらい話だと同情する。きつとこの歳の女の子ならば可愛い服を着飾っておしゃれをしたいだろうに、お嬢様学校というのは常にそうした自覚を求められるのかとため息が出た。

いつまでも駅前にとどまっついては暑さにやられてしまうと提案し、ぼくは彼女と連れ立って近くの大きなショッピングモールに向けて歩いていく。道すがら彼女に尋ねたところによると聖グロには他にも厳しいものから意味不明なものまで様々な校則があるそうだ。ぼくは授業もそっちのけで開催されるアフタヌーンティーの話を聞いて笑い、それは楽しそうだなあと笑う。

「加賀さんの学校にはそういうおかしなことはありませんでしたの？」

「ぼくは良くも悪くも普通の学校だったよ。それにぼくは途中で行かなくなっちゃったから」

ぼくのその言葉にローズヒップさんの表情がサツと変わり、少しだけ身を反らしながら不安げな表情でこちらを見上げる。

「もしかして、不良でしたの……？」

その言葉に一瞬遅れて笑い声をあげ、ぼくを不良だと思わないならいじめられていたと思う方がよっぽど可能性が高いなと想像する。ぼくは馬鹿にされたと思つてむくれる彼女に謝り、すぐに高校時代の話をはじめた。彼女は当初ふんふんと興味深げに頷いてい

たが、やがて眼を大きく見開いてすごいと褒めてくれる。

「じゃあいま私たちが戦車で突っ込んでも掠り傷で済んでいるのは加賀さんのおかげですのね！」

彼女の言葉にぼくは曖昧に返事をし、本当ならばかすり傷ひとつ負ってほしくはないのだが、と頭をかく。

ぼくはなおも言い募る彼女をまあまあと抑え、目星をつけておいたショッピングモール内のパフェの店へと彼女を案内する。ここは以前から自分一人でも来ていた店であるため味やフルーツの新鮮さに関して一切心配がない。職業柄甘いものを食べて脳に糖分を回すのが恒常化しているためこういった甘味の店に詳しくなったのだが、彼女は喜んでくれるだろうか。女性のすべてが甘いものを好きだとは限らないが、統計的に多くの女性が甘いものを好むというデータは多く見たことがある。

入店してテーブル席で向かい合うと、彼女は落ち着かなげに当たりを見渡していたが、やがてメニューが運ばれてくると目を輝かせて品定めをはじめた。どうやらパフェは嫌いではないらしい。ぼくは誰にも気づかれないように安堵のため息をつき、彼女に向けてよければぼくの分まで選んでください、と声をかける。

「ぼくはもう何度も来ているので大体食べちゃってるですよ。いくつか迷ったらぼくのぶんも一緒に選んでいただいて良いので、はんぶんこしましょう」

その言葉に彼女はこれまで以上に熱心にメニューを吟味し始め、結局イチゴがふんだんに使われたものとバナナとチョコソースがかかったものを選んだ。まずぼくがバナナとチョコソースのものを食べ、半分程度食べたところで容器だけを彼女と交換する。どちらも甘くひんやりとしており、夏の午後に食べるにはぴったりだった。

ぼくは嬉しそうにパフェをほおぼる彼女を見ながら喜んでもらえたことに安堵し、実験に付き合ってくれたお礼を出来たようではつと一息ついた。それでぼくも安心してのんびりとパフェを食べ終え、それから手元におかれた水をひと口含む。するとローズヒップさんもいつのまにか目の前のパフェを食べ終わり、考え深げにこちらを眺めていた。

「やっぱり実験はうまくいきませんでしたの？」

そう尋ねられ、ぼくは深く息を吸い込んでから「そうですね」と答える。彼女の身の安全のことばかり考えていたが、どうやらいつのまにか暗い表情をみられていたらしい。

社会人として失格だなあと思いつつも、社会人としての自覚などどう持てばいいのかもわからず苦笑する。

「そうですね。今回は完全に失敗しました」

ぼくの答えに彼女は目に見えて申し訳なきような態度になり、その様子に慌てて次の

言葉を紡ぐ。

「ですがここまでの失敗で次の道が見えてきました。無駄じゃありません。次の実験では必ず成功させて見せます。……ローズヒップさんのおかげです！」

彼女がほほ笑み、ぼくは絶対にばれないように安堵のため息をもらす。足が熱くてたまらず、靴の中で指をこすりあわせるようにしてもぞもぞと動かした。思い返してみるといまままでに被験者の協力を募った実験などしたことがないわけで、彼女の心理状態のケアもこちらの仕事の範疇じゃないかと思ひ直す。

ぼくがしつかりしなくてどうする。ぼくはもう一度彼女の方を見て微笑み、大丈夫だということをしつかりと態度で表現する。その様子に安心したのか彼女はリラックスするようにもう一度椅子に座り直し、それからもう一度ぼくに向けて口を開く

「……でも、どうして加賀さんはここまで戦車の安全性にこだわりますの？」

そう問われ、なぜそんなことを質問するのだろうと考える。ぼくはこの実験について疑問を抱いたことは一度たりともなかったが、彼女からするとそうではないらしい。ぼくが黙ったまま次の言葉を待っていると、遠慮がちに言葉が紡がれる。

「ダーズリン様がおっしゃっていましたが、他のカーボン研究者の方はみんな軌道工程レベーターのことで頭がいっぱいで、ほぼ全てのひとがそちらに尽力していると聞きましたわ。それなのに何故加賀さんは戦車の安全性を？」

「そういえばそんなこともあった! とぼくは久しぶりに軌道エレベーターの件を思い出す。業界ではずいぶん前から注力されてきた研究だったが、先日ついに大手民間放送でその研究について特集が組まれ、世間的にも注目度が高まっていると掃除のおばちゃんの話していた。あのときもいまのローズヒップさんと同じような疑問を投げかけられ「あんた出世コースから外れたね」と皮肉っぽく笑われたが、ぼくは笑って一顧だにしなかった。

「お答えすると、あれはぼくの夢ではないからです」

ぼくの返事に彼女が首をかしげ、「夢?」とこちらが言った言葉をもういちど繰り返す。

「そう、夢です。多くのひとが同じものに向っていくとき、そこで同じ夢を見なければならぬ」とぼくは思っています。部活とか企業とか、そうでしょう。聖グロリアーナの夢はなんですか?」

「……全国大会優勝ですわ!」

「そうです。それが全員の見る夢だ。そして軌道エレベーター研究チームはもちろん全員が軌道エレベーターという夢を見ている。だけどぼくは違うんですよ」

はつきりとそう言い切ると、彼女はそれ以上理解できないように、再び困った表情でこちらを見詰める。カーボン研究者一丸の夢をみないこの男はいつたい何を夢見てい

るのかという表情だ。

「では、加賀さんの夢というのは」

「……それは秘密です」

ここまでできてそれはいいですわ！ と彼女が悔しがりますが、こればかりは照れくさくて言えそうもない。ぼくはなおも食い下がる彼女に苦笑いを浮かべながらお手洗いにたち、洗面台の前で鏡に映った自分の表情を見る。

夢。そうだ、ぼくにはぼくの夢がある。だが、それは果たして研究所全体の方針を無視してまで進める価値のあるものなんだろうか。自分は責任ある立場に置かれているというのにそれを果たさず、子供のようにながままを続けているだけではないか。……たとえそうだとしても、その夢を胸にくすぶらせたままでは生きていけないことはわかっていた。

ぼくは病気だ、とひとりごち、お手洗いを後にした。

戻る途中で会計を済ませ、それから席にもどってふたりで店を後にする。

シヨッピングモールをぶらつきながらも彼女は相変わらず先ほどの件が気にかかっていたようだ、モール内の雑貨屋に気を取られてからはすっかりそれを忘れてくれたようだった。どうやら聖グロではアクセサリーの類も禁止されているらしく、物欲しそうに美しいヘアピンを眺めていたが、やがて名残惜しそうに諦める。

ぼくはなんとなくその様子が気にかかり、その日彼女を送り届けてから一人で店に舞い戻り、彼女が気にしていたヘアピンを購入した。ガーベラの意匠あしらわれた清楚で美しいもので、彼女の髪にそれがつけられたところを想像すると、なんとなく胸が暖かくなるのを感じる。ぼくはそれをプレゼント用に包んでもらい、実験が成功した暁には彼女にプレゼントしようと考えていた。

愚かにもというか、考えなしに。

七月になった。

実験の不調を聞きつけて軌道エレベーターの研究チームから誘いがかかったりもしたが、ぼくは相変わらず耐衝撃実験を繰り返している。向こうはぼくが発見した展延性を主軸に巨大なカーボンをどこまでも広げ、それを円筒にすることで軌道エレベーターにしようとしているようだが、そんな巨大なカーボンなんて作れるわけがない。壁を乗り越える必要があるんだ、とぼくは考える。ぼくも、そして向こうも。

ぼくは次の実験のために戦車全体をゲル状物質で覆うことを考えていた。特殊なカーボンは外からの衝撃を緩和することは可能であるが、内側からの衝撃には頑なであり、搭乗者に大きな負担を強いることになると考える。それを解決するためには戦車の内側から搭乗者を守り、内部に激突した際の衝撃応力を小さくするしかないと感じてい

た。

そのためのゲル状物質だった。シリコンを原料としたこのゲルは二十世紀の初頭に登場し、現在でも社会生活で活用されている。ぼくはカーボンコーティングの上にさらにこれを塗って二重構造にし、外と中から搭乗者を守ることを考えていた。内装全体をコーティングするような量のゲル物質は間違いなく金銭的に大きな負担となるが、人命には代えられないし、いざ施行となれば連盟から助成金も出るだろう。

副所長に見せると「また金のかかる真似を」と怒られたが、前回までの試験がそのままで資金のかからないものだったので大きくは反対されなかった。ぼくは机の引き出しにしまったガーベラのヘアピンを意識する。——彼女が憂いなく走れる道を用意することがぼくの仕事だと思った。そしてそこに何か不慮のことが起こった時、手を伸ばして引き上げられるようにする。

ぼくはますます研究所内で立場を失っていったが、他の何も気にするつもりはなかった。

ぼくは研究を通じて再びあの夏のぼくと出会う。単なる夏の課題だったが、その他の宿題よりもはるかに力を入れて取り組んだことは確かだ。

きつかけになったのはなんだった？

戦車道の年間事故発生数。そしてそれを下げるには選手の意識改革ではどうにもな

らないと知ったからコーティングに目を付けた。

ただのカーボンではないことはわかっていた。ありとあらゆる不活性ガスを検討し、最終的に窒素を主とした三種の不活性ガス雰囲気下において三千度で加熱することに、カーボンは高い展延性を獲得する。ぼくはそれで世界を変えた。そのつもりだった。だが昨年の戦車道全国大会で完全に目を覚まされる。引き下がっていたとはいえず事故は相変わらず起こり続け、全国大会決勝では選手が命の危機にさらされた。

ぼくは何度も何度も無人実験をくりかえしながら考える。今度こそ大丈夫だ。今度こそぼくは自分でも納得できるぐらいに世界を変えてみせる。まるでそれを呪いのように自分に言い聞かせながら実験を繰り返した。

目の下に隈が浮かび、浮かない天気の日が続く。今年は冷夏で七月に入ってもまだ雨が降り続いていたが、研究室にこもるぼくには何の関係もない。そして何度目かの夜があけ、四度目の実験の日が来た。

研究所の職員や学生たち、それからクルセイダーと連れ立って歩いていると、昔家族で観たアニメ作品を思い出す。あの映画の主人公は技術者で、こんな風にして大きな機械を引きずりながら夏の太陽の下を歩いていた。クルセイダーは自分で走ってくれるからあれよりはマシだと思って車体をなで、流星にこの時代に牛で戦車を運ぶことに

なつては困ると笑う。

天気は生憎で黒い雲が重くのしかかっていたが、まだ雨が降り始めてはいない。ぼくは時折差し込む陽の光を受けて鈍く輝くクルセイダーに「頼んだぞ」と声をかけたが、その姿をこのあいだ陰口を叩かれた学生にこちらを見られて黙り込む。それ以外にも今回協力を快諾してくださった方々やさらには副所長までいらしており、これまでの実驗とは違つて大変な大所帯だ。

観覧客が増えるのは良いが、それが緊張感になつてぼくを締め付けるのを感じた。特に舗装もされていない道を会話もまま歩き、普段通り巨大な鉄板が打ち立てられた実験場にたどり着く。考えてみると目の前にただ巨大な四角い板が建てられているのはかなり不可思議な光景だが、もしかするとあれがぼくの福音になるかもしれないと思うとなんだか少し神々しく見えてくる。くだらないことだ。

ぼくは笑いながらクルセイダーに捕まり、よじのぼつてキューボラを引いて開く。運転席に座つたローズヒップさんが首だけをこちらに向けて自信満々にほほ笑み、小さく手を振る。どうやら彼女は緊張という言葉とは無縁らしく、すこしだけうらやましく思つた。ぼくは半分だけ身体を乗り込ませて彼女に手を差し出し、それをお互いにごゆつと握りあう。

ぼくがクルセイダーから離れるとすぐにカウントが始まり、エンジンを稼働させた戦

車が力強く震えはじめる。その姿はいまにも目標に向かって放たれる矢のように見え  
た。

五秒の後、鈍重な様子で発進したクルセイダーがあつという間に最高速度に達し、平野の向こうに設置された鉄板へ向かつてまっしぐらに突貫していく。鼻先に雨粒が当たると感じた。戦車はなおも雨粒をかきわけ、土煙と雑草の入り混じった粉塵を巻き上げながら、全てを振り切るように走り続ける。ややあつて周囲に轟音が響き、車内の状況を計測していた計器が衝突の影響を算出し始める。

これに関してはなんの問題もない。ぼくはサンダルがつつかかるのを感じながら戦車に向けて走り出し、いままさにキューボラから顔を出したローズヒップさんに駆け寄る。洗車の上からぼくを見つけたローズヒップさんは一瞬嬉しそうに顔をほころばせたが、ややあつて暗い顔で俯いてしまった。

ぼくは弾む息を整えて彼女に声をかける。

「……………どうですか」

「体感ではあまり……………」

そうですか、と答える言葉も消え入りそうだった。二度目で前方左側の装甲にローズヒップさんが腕をつき十分打撲になりえる衝撃が与えられたことが計測され、三度目で戦車内部に張り巡らされたゲルに亀裂が入った。衝撃応力を下げることができてもゲ

ル素材自体の限界を超えて横方向の衝撃が走り、それで内部コーティングはだめになってしまふ。

またも実験は失敗だった。ぼくは雨が降っているのも構わず白衣のポケットに手をつつこんでそこらじゅうを歩き回った。見物に来ていたみなさんはそれぞれにひきあげていったが、そんなことをする気分にはなれない。大勢のまえで実験が失敗した恥じらいが胸のなかで湧き上がり、ちっぽけなプライドが全身の血を熱くするのを感じた。雨がサンダルから靴下にしみこみ、歩くたびに湿った音を立てる。

そのとき、撤回する人たちの中から「一発屋」という言葉が聞こえた気がした。

一発屋、一発屋、一発屋だ。確かに間違いない。ぼくは一発屋だ。だけど世の中に一発当てられない人間がどれだけいる？ ぼくは一発当てた。……それで良いじゃないか。いや良いわけがない。富や名声のためにやっている研究ならあの夏休みで終わっているんだ。ぼくが研究をつづけたのは、夢を……。

「加賀さん」

「……ローズヒップさん」

不意に声をかけられて思考が中断される。声を発したのは実験を終えて制服に着替えたローズヒップさんで、白いレースの傘をさして心配そうにこちらを見詰めていた。

「もうみなさんお帰りですわ。加賀さんも行きましよう」

その言葉とともに傘を差し出され、ぼくはその手をとって彼女が濡れないように傘を傾ける。ふたりに歩きはじめると、彼女が少し膝をひきずるように歩いているのが見えた。

「ローズヒップさん、それ」

それはよく見るとほんの少しのすり傷で、彼女の脚を覆うタイツを破いて少しだけ血がにじんでいるのが見えた。ぼくは実験場を抜けると大丈夫だと食い下がる彼女の言葉を無視してタクシーを捕まえ、研究所まで運んでもらうことにする。実験にも失敗して協力者には怪我をさせ、ぼくの胸にこのまま消え入りたくなるような後悔の念が押し寄せてきた。

こんなつもりではなかったという言葉が頭に浮かび、甘ったれた言い訳をするなど自分に言い聞かせる。

タクシーから降りたぼくは彼女の手をとってできる限り負担をかけないように進み、自分の研究室の椅子に彼女を座らせる。ここで待っていてくださいと声をかけるとすぐに廊下で掃除のおばちゃんを捕まえ、救急セット一式とあたたかいお茶を用意してもらうように頼んだ。ぼくの研究室を覗き込んだおばちゃんがにやにやといやらしい表情をしていたが、本当に怒りますよ！ と声をかけるとおほほと笑い声をあげて逃げ出していく。

ぼくは再び研究室に戻り、彼女の脚の様子を見る。

「打撲にはなっていないですね。ただのすり傷みたいだ……。傷のまわり、タイツを丸く切り取っても良いですか？」

「大丈夫ですわ」

その言葉に従ってタイツを切り取ると、まるで石膏のように滑らかな彼女の膝があらわになる。朱を吹いたように赤く染まったすり傷が痛々しく、ぼくは謝罪の言葉を口にしながら消毒液を吹きかけた。彼女の表情がわずかに痛みにそまり、それが我がことのようにつらく感じる。彼女の膝を脚に乗せたまま治療を続けていくと、ずっと言葉少なかった彼女が口を開く。

「お役に立てなくてごめんなさいですの」

「ぼくの方です。絶対にけがをさせたりはしないと思っていたましたが、大会もあるのにこんなことになってしまった」

「……大会はその、準決勝で負けてしまいましたの」

心臓が大きく跳ね、すぐに「失礼しました」と謝罪を口にする。いったいなにをやっているんだと自分自身を責め、そして被験者の様子すら全く考えることなくひとりよがりを実験を進めていた自分のことを心の底から恥じた。そうなる**と**ぼくは準決勝に負けて間もない彼女のもとに、ただ事務的なばかりの実験の実施要項を送りつけたのか。

自分の馬鹿さ加減に吐き気がしてきた。

「か、加賀さん。泣かないでくださいまし」

彼女にそう言われ、いつのまにか自分の頬を涙が伝っていることを知り、自分のみじめさに嗚咽を漏らした。天才少年だのなんだのと崇められても、ぼくはあまりにも子供だ。神童も二十過ぎればただのひととはまさにぼくのことじゃないか。気の利いたことのひとつもできないし、恥知らずにもこんな時に涙があふれて止められない。

ぼくが泣きやむまでしばらくの時間がかかり、その間彼女はずっとぼくのことを見ていてくれた。

「負けはしましたが、後悔はしていませんわ。私たちはダージン様の指揮のもと全力を出し切りましたし、私にはまだ来年も再来年もありますもの！」

見上げた彼女の表情はすでに次を見ていて、その顔がまぶしくてぼくはまた少し目を伏せる。この意志だ。前に進み続け、それを恐れない意志。初めて見た試合で見せた不屈の闘争心と、話すごとに感じられるそのひたむきさがぼくを惹きつけてやまない。

彼女だ。彼女こそが再び実験をする原動力なんだとぼくは気づく。

ぼくの心の中にやけっぱちの力が湧き上がり、こうなればなんでも言つてやるという気持ちになる。白衣の裾を握りこみ、大きく息を吸った。どうする。そうだ、実験が成功したら、いやもう実験とか研究とかどうでもよくないか。いやどうでもよくは、でも

もううまくいかないしどうでも。ぼくにはこのひとさえ……。

そう思った瞬間、彼女の脚が気にかかつて他に何も考えられなくなった。

「失礼します」

「えっ!? ひゃあああ!」

悲鳴をあげるローズヒップさんにも構わずぼくは胸元から眼鏡を取り出し、怪我をしてタイツが破れた彼女の脚を掴む。怪我をよけるように丸く切り裂いた彼女のタイツをひっぱり、その破れた穴に指を入れて強く引つ張る。

——なぜタイツは穴が開いても全体が切れないんだ? たとえば伝線することはあってもそれで全体が破れることは無い。穴が開いても崩壊することは無い。ぼくはタイツを広く伸ばしその構造をしつかりと目に焼き付ける。家庭科で習うような単純な編み方ではないが、かといってそれほど複雑なものではない。しかしこの蜘蛛の巣状か格子状の網目が互いに強固に結びつきあい、一部をほつれさせても全体を崩壊させずに保っているのだ。

「これだ……」

これをカーボンで作ればいい。

「はいはい。おばちゃんがお菓子とお茶を持ってきてあげたか、ら……ね……」

「ちよつとそこに置いといて……」

振り返るとそこでおばちゃんが硬直していた。この状況をよく考えてみる前に、ぼくはもう一度ローズヒップさんの顔を見上げる。そこには羞恥で真つ赤に染まった彼女の顔があり、涙目で唇をわなわなさせていた。次にぼくだ。膝の上に彼女の脚を乗せてタイトの穴に指を突っ込み、しかもそれを唇がつきそうなほど近くで眺めている。最後に掃除のおばちゃんだ。大変だ。

「待て、これは学術的な研究行為であり」

最後まで言い切ることなくぼくはローズヒップさんから鉄拳を受けて倒れこみ、それから物言わぬ掃除のおばちゃんによってモップで殴られ続けた。

展延性だ！　こいつが、ほかでもない過去のぼく自身がぼくの視野を狭くしていたことに気が付く。いつまでたってもぼくはこいつを全体に塗りたくることばかり考えていたし、軌道エレベーターの連中もそうだ。自由に形を変えられるからと言ってそれにこだわり続ける必要がどこにあるというのか。

ぼくは翌日真つ赤に腫れた頬を冷やしながら加工実験場に赴き、特殊なカーボンの加工工程をひとつかえてもらう。過去に自分で行った不活性ガス雰囲気下の過熱を止め、ダイヤモンドと合成させて超高温の常温過熱を行うのだ。かつて展延性実験の副産物として発見し、それ以降は見向きもしていなかった加工法だが、とんでもないこと

だった。これはふたつでひとつの実験結果だったのだと今ではわかる。

出来上がった繊維質の合成体を用い、ぼくは何本ものしなやかなロープとして加工してもらおう。準備はすべてばっちりだ。ぼくはそのうちの一本、直径三ミリほどの太さを持つそれを重さ二十トンのコンテナに括り付け、見事に巨大重機で持ち上げられるところを見た。

「（こりやす）い……」

隣に立った加工実験場のひとが感嘆の声を漏らし、こいつをどう使うんですかと尋ねてくる。

ぼくはその言葉に笑顔で「タイツを作るんです！」と答えた。

## 『キヤツチャー・イン・ザ・タンク 後編』

紆余曲折ありはしたが、あのあとローズヒップさんはぼくの謝罪を受けいれてくれた。

顔を真っ赤にしながら目に涙をうかべていたし、これはもう裁判沙汰まであるかもなあと思っていたんだが、あのあと土下座して謝ると「研究職の方ってこうですの……？」と諦めたような表情をしていた。代わりにもう一度美味しいものをごちそうしてもらいますと言われ、そんなことでよければいくらでもとぼくは答える。その際おぼちゃんも食べたみたいなの顔をしていたが、あんたさつき無実（でもないが）のぼくを殴っただろと目で語りかけると素直に引き下がった。

一週間後に同じように駅で待ち合わせと彼女から言われ、ぼくはその日も精いっぱいのおしゃれをして家を出た。駅前はこのあいだよりもさらに人が多く、そのなかにはちらほらと浴衣の少女が混じっている。ぼくは呆けた顔で今日はどこかでお祭りなのかと考え、いつの間にか目の前に立っていた彼女に気が付くことが出来なかった。

「加賀さんっ！」

そうローズヒップさんから呼ばれ、ようやく目の前に立っていた浴衣の少女が彼女だ

と気が付く。白い浴衣に印象的な金魚の図柄。それが彼女の白い肌と赤い髪に驚くほどよくマッチしており、ぼくは一瞬言葉を失う。

「ローズヒップさん、外出の時も制服って」

第一声だというのに、驚きからかぼくの口からはそのような言葉しか出てこない。彼女はそんなぼくの様子をみて「えへへ、秘密ですわ」といたずらっぽく笑う。ぼくはいかん、いかんと頭を振り、気を取り直してもう一度彼女を見詰める。こんな気の利かない第一声があるか。

「綺麗です。とてもよく似合っています」

ぼくの口からそんな言葉がこぼれ、すぐに彼女が顔を真っ赤にして歩き出す。それに慌てて「はぐれないように」と声をかけると、伸ばしかけた手をぎゅっと掴まれた。彼女はなるべくこちらを見ないように視線を遠くに投げ、なんでもないことのようにつぶやく。

「これではぐれせんわ」

ぼくはそれに照れ隠しで「合理的です」と呟いたが、彼女はすべてを見透かすような笑みを浮かべた。女の子はなぜこんな超越したような表情をできるんだろう。小さい頃から同級生の女の子がこんなふうにはびどく大人っぽい表情をすることがあり、これは昔から不思議に思っていた。

気を取り直してぼくは彼女が望むままに可愛らしいりんご飴や屋台の軽食を購入し、ふたりでそれを半分ずつわけあう。基本的に小食なのであまり食べられはしないが、彼女はぼくのおごりということもあつてよく食べ、やがて満腹になつてしまつたようどこかで休みたがつた。彼女の手を引いて祭りの大通りから抜けると、ふたりで神社の石段に座り込む。裏道を選んだのが幸いだったのか人通りは少なく、祭りの喧騒が遠くに聞こえてきた。

今更絶対にはぐれようもないのにぼくたちは相変わらず手をつないだままで、ふたりの手に滲んだ汗まで心地よかつた。

「実験はうまくいきそうですの？」

不意にローズヒップさんがこちらを見詰め、どこか心配そうな表情でそう尋ねてくる。ぼくは彼女に無用な心配をかけてしまったことを恥じ、すぐに胸を張つて「問題ありません」と答えた。

「次は必ずうまくいきます。もう実験は終わりです」  
「そうですの……」

彼女の声に惜しむような響きがあり、ぼくは首をひねる。不安にさせないようにと思つていった言葉だったのだが、どうやらそれでもぬぐえなかつたらしい。それでも、実験を行えばやがてすべてはうまくいくだろう。

「夢が」

「え？」

「二度と戦車が戦争に使われるようなことがあってほしくない」

そう呟くとローズヒップさんが潤んだ瞳でこちらを見詰めてくる。その瞳があまりにも美しくて言葉に詰まる。

「……前に夢の話をしましたね。それがぼくの夢です。戦車道は、かつての辛い戦争を乗り越えて人類がそれを競技にまで発展させることができた、平和の武道です。ぼくはこの火を絶やしてはいけないと思うし、そのためなら何でもします」

言葉を区切り、周囲に視線を巡らせてもう一度彼女のことをみる。その瞬間に火花が上がった。遠くからの光が彼女の頬を照らし、色とりどりに染め上げる。この世界の平和を、そして未来を担う姿だ。

「ぼくは君たちが世界を変える手伝いがしたいんです」

呆れるほど情けないような情熱を口にして、少し恥ずかしくなる。だけど生まれて初めて特殊なカーボンのことを知ってからずっと、ぼくはあんな風に世界を変えたいと思ってきた。そして自分にはそれができると、燃え上がるような確信を持ってこれまで進んできた。

「実験が終わっても私とお会いしてくださいます？」

「それは——、もちろんです」

直後、気恥ずかしさで俯いていたぼくの手が引つ張られ、身体全体が前のめりになる。驚いた拍子に顔をあげると目の前にローズヒップさんの顔があり、頬に柔らかな感触が伝わった。

「私も、加賀さんの夢をお手伝いしますわ」

かすかな声がぼくの耳に届き、彼女はそれきり何も言わなかった。ぼくらはそれからしばらくの間ふたりで並んで花火をみつめ、どちらからともなく駅へ向けて歩き出す。駅で別れる最後の瞬間まで手は放さなかった。

よく晴れた日だった。

ぼくは普段通りに起きてワイシャツとチノパンに着替え、胸元に携帯音楽プレーヤーを押し込む。朝ごはんはインスタントの味噌汁とごはん、それからなんてことないコンビニのお惣菜。家を出る前に仏壇に手を合わせ、言つてきますと声をかけた。

父さんと母さんは事故で死んでしまっていた。高校一年生の冬のことで、もう少しだけあの事件が遅ければふたりをぼくの研究で助けられただろう。ローズヒップさんには格好いい外向きのことを言つたが、思えばいつまでもこの研究テーマにしがみついているのも、このせいなのかもしれないと考える。ぼくは両親のことを想い、今日世界を

変えてくるよと呟く。

家を出てから耳にイヤホンを押し込み再生ボタンを押すと、これまで何千回と聴いてきた大好きなバンドの代表曲が流れ出す。もしさつき決意したようなことが敵わなかったとしても立ち止まってはいけないと思う。世界を塗り替えたり戦争を無くしたり、そういうことがもしできなくなったら、ぼくもまた走り出すしかない。

通勤電車のなかで調べたところによると、最新のデータでは現在世界人口の七十人にひとりが紛争に巻き込まれているらしい。二十世紀初頭の数字が三人に一人だったことからすると偉大なる進歩と言えるが、それでも世界には理不尽な暴力に巻き込まれる人間が確かに存在している。あのひとが開発したカーボンはそれをくまなく救うだろう。そして世界はもっと美しくなる。未来は常に光り輝いていると思った。

研究所に到着し、戦車の最終チェックを行う。機器類は全て正常に作動しているし、戦車自体にも不備は見られない。ぼくはその鼻面を撫でながら高くそびえる砲塔を見上げる。ポケットの中でラッピングされたブローチを探り当て、すぐにローズヒップさんがおまえを連れて行ってくれるからな、と思う。

「また、戦車かよ」

その声に振り向くといつかの学生が立っていて、彼の姿に少し怖気づくのを感じる。そんなに邪険にしなくなつていいじゃんと思うんだが、たぶんなんか思うところがあ

るんだろう。いまの彼には今日こそ言つてやるぞという雰囲気があり、ぼくは戦車から手を離して彼と向き合う。思えば同じ副所長の預かりだというのにこれまでしつかりと話したことは無かった。

「あんたさあ、せっかく天才とか言われてるのに、なんで軌道エレベーターの方に行かないで戦車道の安全性なんてやってるんだよ」

こちらに向かつて歩いてくるにつれ、彼の視線が上を向くように動いていく。こうして並んで立つと随分背が低いんだなあとと思う。身長百五十センチちよつとしかないんじゃないだろうか。怒りつぽいし、多分牛乳が嫌いだったんだらう。

「聞いてんのかよー！」

「あ、ごめん」

間の抜けた返事に「つたくよお！」と悔しそうな声上がる。

「そういうの無責任じゃないのかよ。あんたの研究でみんながやる気になってんのに。あんた金もらつて研究員してんだろ!? 大人なら自分のやりたいことやつてる場合じゃねえよ！」

彼の言葉は間違ひなく正論で、心の奥が痛みでじくじくとうづく。しかしそれでもぼくは自分の研究対象を変える気には一切なれなかつた。ぼくはたぶんこのまま一生涯子供なんだろうと思う。それがぼくという人間にかけられた呪いなんだ。

「無責任だと思っけど、ぼくにとつては軌道エレベーターよりずっと戦車道の安全のほうが大事なんです」

ぼくは彼の眼をまっすぐに見つめ、はつきりとそう断言する。彼が反論しようとして口ごもり、次第に顔を赤らめるのを見た。

「さっさと戦車なんかやめて軌道エレベーターに来いよ！ でないとこの研究所に来た意味ねえじゃん！」

顔を真っ赤にして言うだけ言って去っていく彼を見て、ぼくは申し訳ない気持ちでいっぱいになる。自分で言っておいてなんだがどっちがどっちというものでもないだろう。だけどまずは戦車だった。軌道エレベーターなんてものはぼくにとつては大きすぎた。まずは戦車、それからちよつとずつ世界を広げていけばいい。そして今日がその足掛かりとなる。

戦車はぼくにとつて止まっていた時間を動き出すための研究だった。

しばらくして聖グロの校章が入った車が研究所内に乗り入り、ダーズリンさんとアツサムさんに続き、小柄な亜麻色の髪の女の子とローズヒップさんが現れる。ぼくは彼女たちに手を振り、所内から副所長が出てくると全員に向けて声をあげた。

「じゃあ、遠足に行きましょう」

元氣よく返事してくれたのはローズヒップさんだけだったが、なんとなく犬を散歩に

連れて行くみたいだと失礼なことをかんがえる。

実験場の近くまでは全員でバスに乗り、それからいつかと同じように戦車をひきつれて実験場への平野を歩く。途中で副所長から「実験が終わった後のことを考えておけ」と耳打ちされる。忙しくなるから、と声をかけられた。

実験場で最終チェックを行う。戦車のなかは一見普通のものとは何も変わり無いように見えるが、よく目を凝らすと薄くメッシュ状に編まれたカーボンが全体に張り巡らされていることがわかる。これがぼくの導き出した正解だった。外からはコーティングで守り、中からは優しく受け止めてあげればいい。そしてタイトのように編み上げれば一部が破れても全体がほつれることはない。

ぼくはクルセイダーに乗り込むローズヒップさんに近寄り、手を突いたりしちやだめですよと声をかけた。

「受け身を取るようになれば、絶対にぼくが守ります」

彼女の瞳がかつてないほど激しく燃え上がり、ぼくにむかって強く返事を返す。乗り込む寸前、誰にもわからないぐらい短い時間ぼくらの手がふれあい、お互いの指の先をつまむように握り合って離れた。

カウントが始まる。ぼくの心は驚くほど平静を保っていた。日本の夏らしくない乾いた風が平野に吹き抜け、生い茂った草を揺らす。周囲は驚くほど静かで、カウントの

音以外何も聞こえてくることは無い。

いけ！ と念じた。一瞬後に戦車が走りだし、そしてあつという間に最高速に達する。風を切り裂いて走る姿はまさしく突風のようにであり、彼女はすべてを振り切るように走った。

衝突。誰も声をあげることはない。計器だけが少し間拔けな音をたて、ぼくはそれを見ることもなく小走りで戦車に近寄っていく。計測の結果なんてみなくてもわかつている。あとは彼女の口から聞くだけだ。

走っている途中でキューボラが開き、初めて見た時と全く同じように彼女が戦車から現れる。その姿に一点の曇りもなかったが、ただ胸元についた紅茶のシミだけはどうしようもないと笑う。

「どうですか？」

「ぼつちりですわ」

「どこかにぶつかりましたか？」

「肩から倒れましたの」

「それは良いですね」

二人でスタート位置まで戻り、計器を確認する。戦車内部の衝撃は全くと言っていいほど少ない微弱なものだった。彼女の言葉が本当ならば、クルセイダーは時速六十キロ

で厚さ百センチの鉄板にぶつかり、その衝撃で倒れた彼女を完璧に受け止めたらしい。車内カメラでもそのように映っている。

第二回の実験も滞りなく進み、そして第三回でも結果が変わることは無かった。

彼女が隣にたち、ぼくの名前を呼ぶ。

ぼくは大声で叫んで彼女のことを抱き上げ、そのまま実験場を走り回った。一瞬遅れて副所長や掃除のおばちゃん、聖グロの生徒たちも声をあげ、ぼくは戦車をぐるりとまわってからローズヒップさんを降ろし、それからもう一度抱きしめる。掃除のおばちゃんにやにやといやらしい顔で近づいてきて、ぼくの耳元で「あたしは信じていたよ」と全人類が信じないような言葉をささやく。

「初心わするるべからずだなあ」

呆然とした副所長がそう呟く。ぼくはその言葉に何も返さず、もういちど実験を終えたクルセイダーの中に入っていった。戦車内に深くかがみこみ、薄く、どこまでも薄く張り巡らされた網を指先で引つ張る。特殊なカーボンの超高弾性があつてこそできる極細のセーフネット。ぼくは古い青春小説からこれをホールデンネットと名付けた。着想を得てから成功まで一週間とかからず、試行錯誤したのはせいぜい糸の太さぐらいのものだ。

戦車から這い出し、そこから見える夏の風景を眺める。するとすぐにローズヒップさ

んがそばに駆け寄り、満足げにぼくの顔をながめた。ぼくは戦車に肘をついていた彼女の手を引きあげ、掌を広げさせる。ポケットの中に入っていた袋を取り出すと、そつとそれを彼女の掌の上にのせた。

「ぼくから実験のお礼です」

彼女が包装を取り外すと中から真っ白いガーベラのヘアピンが現れ、眼がまんまるに見開かれる。やがて彼女が感極まったようにふるふると震え、ぼくを押し倒すようにのしかかってきた。出口に身体をぶつけてしまつて背中がじんじんと痛む。だがそんな思いは一瞬後、彼女に唇を奪われた瞬間に全て霧消していた。

聖グロの子たちが感嘆の声をもらし、掃除のおばちゃんが「わたしも若い頃は……」と訊いてもいないことを話し出す。副所長がつぶやく「やばいぞ。犯罪だぞ」という言葉が耳に残る。

まあ、どうだっていい。

ぼくは全身をぐいぐいとおしつけてくるローズヒップさんを負けずに押し返し、戦車から這い上がつて彼女のことを抱き上げる。足場が不安定だがそれもどうだっていい。

ぼくはもう一度彼女とキスをした。

結果というのは後からついてくるものだを知る。

それから一か月ほど経ってホールデンネットは世界中に知れ渡ることとなり、ぼくは再びお茶の間の人気者になった。とはいえ取材のときは緊張して全然しゃべれなかったし、喋った部分は殆どカットされていたので有名な顔だけだ。外に出ると知らない人に絡まれるようになって煩わしいし、車でしか通勤できなくなっただけであまりいいことがない。

——いや、一発屋と言っていた連中を見返したおかげで研究所内を堂々と歩けるようになったのは良かった。これだ。

ぼくはローズヒップさんとふたりで紅茶を飲みながらにこにここと笑う。

「要は戦車内のあの糸を束ねて太くするだけでいいんですよ」

そう伝えると彼女はふんふんと頷き、興味深げにぼくの話聞いてくれる。彼女のタイツに着想を得てからずっと考え続けていた構想だ。若い女の子にとっては全然面白くない話だと思うのだが、彼女はどんなことでも興味津々と言った様子で聞いてくれるから、こちらとしてもつい話しすぎてしまう。

「それだけであれは尋常でないほどの強度を持ちますし、それでまたタイツを編むんです」

「……あれはやっぱりタイツですよのね」

なんとなく苦い顔をうかべる様子に苦笑する。それも全部あなたのおかげですよ

言おうと思ったが、きつとそんなことを言っても喜んでほくれないだろう。事情を知っている人たちからするとぼくはすっかりタイツフェチだった。一発屋の次はタイツフェチか、とへこんでしまわなくもない。

「で、それを編んだものをひたすら伸ばしていつて、最後には宇宙まで届かせるんですわよね」

「そうです。よく覚えていましたね」

「でもそんなこととしてどうなるんですの？」

「ぼくたちが自由に宇宙に行けるようになって、ありとあらゆる面で世界が変わります」  
先日出たデータによると、軌道エレベーターが完成するまであと十年ということだった。ホールデンネットはカーボンの展延性を利用して巨大な円筒を作り出すよりもよほど簡単にコストも低く、実現性は遥かに高い。今もうすでにそれに耐えうる太さのホールデンネットが研究所で作られ、世界はそれに向かって邁進している。

軌道エレベーターができれば間違いなく世界は変わる。軌道上での太陽光発電が成功すれば世界のエネルギー問題は全て解決されるかもしれない。素晴らしいことだと思ふ。だが、ぼくにとつてそれら全てはおまけみたいなものだった。

ぼくは黙って彼女のことを見詰める。少しツリ目がちの大きな瞳。燃え盛るような真紅の赤毛。そして前髪を留める真っ白なガーベラのヘアピン。どこをとつても可愛

らしい最愛のひとつ。彼女と出会えなければ軌道エレベーターもホールデンネットもない。全て彼女のおかげだった。

……とはいえ、どうやらぼくには色々と見えていなかったものがあるらしい。当初は実験を快諾してくれたことについて奉仕精神の高い天使のような人だと思っていたが、どうやら彼女は単にスピード狂で思いつきり戦車をかつとばせることに喜んで快諾してくれたそうだ。ダーズリンさんに耳打ちされて初めてその事実を知ったが、そのときは自分の盲目さにひとしきりわらった。

「次は戦車の駆動性能の向上について勉強するのも良いかもです」

そう呟くと彼女は面白いほどに表情を変え、犬耳がついていたらピンと高く伸ばしているだろうな、と思えるぐらいにそわそわし始めた。ぼくはその姿にまた笑みをこぼす。

彼女が戦車を走らせる理由が勇気によるものだろうと、単なる暴走癖だろうと全く構わない。大切なのは彼女のそれを恐れることない精神だ。人間は常に前に進み続けるし、それを止めることはなんにだってできやしない。ぼくはひとりの科学者としてそれを手助けすることができたことを誇りに思い、そしてそうさせてくれた彼女に心の底から感謝している。

ぼくは彼女の手をにぎり、それから何度か深呼吸をした。

「ローズヒップさん、あなたを愛しています。是非ぼくと一緒に世界が変わるところを見ましよう」

彼女の頬が桃色に染まり、それからもじもじと全身を居心地悪そうに動かす。今更もう彼女に対して秘密はない。戦車道の安全性についても、父と母を事故で失ったことも、ぼくは全て彼女に打ち明けていた。あの試合のとき彼女のどこで惹かれ、なぜ実験への協力を申し出たのかも。

彼女はすっかり照れて買い被りですわ、と言っていたが、問題はそんなこと関係ないぐらいすっかりぼくが彼女のことを愛していたことだった。

そのまましばらく彼女のことは見詰めていると、ついに向こうが根負けしたように大きなため息をつく。顔を赤くしたまま俯き、上目づかいにこちらを見ながら囁くような声で言う。

「お転婆ですわ。いつも怒られていますの」

「可愛らしいです」

「紅茶こぼしちやいますし」

「拭けば良いじゃないですか」

「スピード狂って怒られますし」

「戦車だけにしておいてくれれば」

何を言われてもすぐに言い返せる自信はあった。

「たぶんまだまだ護さんの知らない、おかしなところがいっぱいありますわ」

「これから全部知っていけばいいと思います」

そう答えるとやつと彼女が笑った。何を言っても無駄だと気が付いたらしい。

「どうかですね、きつと問題はぼくのほうが多いですよ」

「では私たち問題だらけですわ」

「でも、完璧な人間なんて存在しない」

それでも前に進むし、選択することが出来る。

「……あなたの夢をお手伝いすると、そう言わせてもらったはずですよ」

答えはそれだけで十分だった。